



武藤 光一  
社長

不確実性と成長のチャンスが共存する未来を、当社にとって実りのある現実にするためには、変化の予兆をつかみ素早く対応できるかどうか鍵になります。国際海運の需要は世界経済の発展と共に一貫して成長していますが、成長の速度や、どのような貨物がどこでどれくらい動くかは、その時々各国の経済、貿易構造の変化、時には政治情勢などの影響を受けます。

過去10年余りを振り返った時、前半、新興国経済の急成長とともに事業規模を従来とは異なるステージにまで拡大できたことは、予兆を的確につかみ行動した結果だと言えます。しかしその後の異常な市況高騰時に積み上げてしまった過度な市況エクスポージャーは、後半、当社の業績に大きな重荷となりました。

私は、2010年6月に社長に就任しました。

2010年度こそ良好な業績をあげたものの、続く2011年度、2012年度は、欧州金融危機、自然災害、円高、燃料油価格の高騰など、いくつものマイナス要因が一度に発生、そして何よりも新造船の大量竣工に伴う船腹供給過剰により市況に連動する当社の収益が悪化し、中長期契約に基づく安定利益を毀損するかたちで赤字計上を余儀なくされました。2012年度は配当を見送り、株主の皆様への期待を裏切ることとなりました。

こうした中、当社は、外部環境の好転を待たずに業績改善を可能とする抜本的な改革が必要と判断、2012年度第4四半期を期して「事業改革」を断行し、ドライバルク船を中心に市況連動収益の改善を図りました。その上で単年度経営計画「RISE 2013」に取り組み、黒字必達と成長軌道への回帰を目指しました。この結果、2013年度においては、経常利益549億円、当期純利益573億円を確保し、配当(1株当たり5円)を再開することができましたことを、ここに報告致します。

就任以来、私は、過去の反省も踏まえ、ビジネスインテリジェンスの強化に努めてきました。顧客や情報機関など可能な限りのソースから様々な情報を収集し、組織として共有した上で、俯瞰し、確かな大局観をもって、有望な市場や事業環

境の変化の予兆、そしてリスクの在り処を明らかにします。

2014年度から取り組む中期経営計画「STEER FOR 2020」は、そうした、当社グループの役員・職員全員で作出したビジネスインテリジェンスの集大成に基づき策定されました。もとより100%確実な情報はなく、一切のリスクを伴わないチャンスもありません。十分な検討を行った上で決断し、必要な施策を立案し、スピードをもって行動することが大切です。これによって、当社が企業理念に掲げるように「顧客のニーズと時代の要請を先取りする総合輸送グループとして世界経済の発展に貢献」しながら、当社自身が厳しい競争に打ち勝ち、企業価値を高めていくことができると思います。

中期経営計画「STEER FOR 2020」においては、右肩上がりの海運市況を前提とする経営とは一線を画し、新たな物流機会を捉えて、顧客のニーズと信頼に応え、安全運航や技術力によって差別化を図りながら、長期的な安定利益を積み上げていく方向に大きく舵を切ります。そのために経営資源の選別的・集中的な投入を行い、2020年までに強固な財務基盤を築き上げます。この基盤の上に立って、その先の10年はまた異なる戦略による成長に舵を切ることもあり得ます。新たな針路は、現計画の遂行と並行して継続・強化されるビジネスインテリジェンスに基づき、検討され、決断されます。

このようにして当社は、引き続き拡大する海上輸送需要に応えながら、持続的な成長と、長期的な企業価値の向上を図ってまいります。株主の皆様におかれましては、引き続きご理解とご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

2014年6月24日

武藤光一

武藤 光一  
社長